

# 熊本市域における幼児語の研究

大津山 喜美子

## 序論

子どもは、生まれてから、やがて、母親や自分の周囲の者ことばを聞くようになり、自分でも話せるようになる。

幼児が、どのようにしてことばを習得していくのか。その言語発達の間程をみてゆき、幼児語の特徴をとらえようとするのが、この論文の目的である。

ここでいう幼児とは、1才から6才までの就学前児童のことである。

幼児語の調査研究の方法として、次の二つがある。

一つは、大勢の幼児のことばを、集団的にとらえる方法である。

もう一つは、一人の幼児の言語発達を、長期間にわたって調べていくのである。

この二つの方法が、同時に行なわれることが、望ましいのであるが、筆者は、前者の方法をとった。(後者の方法としては、J児△女▽を対象にして、2才から3才にかけての短期間ではあるが、調査し、参考にした。)

幼児の年令、性を明記し幼児のことばを速記したカードは、千五百七十枚余に及んだ。

被調査者は、愛光幼稚園(熊本市大江町)の園児、約六十名である。

園児の一人ひとりが、年令別に色分けした名札を、胸に付けていたために、調査しやすく、年令は、確実にメモされたものと考えた。

その他の被調査者は、J児(女)、近所の子どもである。

なお、実際に、子どもに接してみて、それぞれ、個人差があるということが、はっきり認められた。本稿は、あくまでも、幼児言語の一つの傾向としてみていくことにする。

## 第一章 幼児語の特徴

この章では、「幼児独得のことば」と「幼児音」について考えてみたい。

### 1 幼児独得のことば

おとなは、子どもに合わせて、言いやすく、わかりやすく話しかけようとする。子どもは、そのおとなのことばを覚えていく。そこに、幼児独得のことばというものが生じてくる。

まず、分類してみると、次のようになる。

(分類法は、中沢政雄氏「ことばの診断と治療」△子どもことば▽△東京創元社▽を参考にした。)

①おきなことば—子どもに、わかりやすいように改めたことばである。

(例) ネンネ(眠ること)・アンヨ(歩くこと)

② なぞらえことば(音や鳴き声によってその実体を表わしたことばである。

(例) ワンワン(犬)・チツチツ(鳥)

③ 重ねことば(わかりやすいように、同じことばを重ねていったものである。

(例) オメモ(目)・オテテ(手)

④ さかさことば(音韻転倒) 一音節が、上下に入れかわったことばである。

(例) オトン(外)・トナダ(戸棚)

⑤ 省きことば(音節の脱落) 一音節を省いて、簡単にしたことばである。

(例) クシタ(くつ下)・アガト(ありがとう)

⑥ 替えことば(音韻交替) 一音が他の音と入れかわったことばである。(後で述べる幼児音である。)

(例) オイチイ(おいしい)・ラクラ(ラクダ)

⑦ 縮めことば(短音化) 一長い音節を短かく縮めて、短音に発したことばである。

(例) カイジュ(怪獣)・ブド(ぶどう)

⑧ 延ばしことば(長音化) 一音節を引きのばして、長音に発したことばである。

(例) トーンネル(トンネル)・キーチャ(汽車)

⑨ つくりことば(類推により、子どもがつくり出したことばである。

(例) シババレ(顔によったしわのこと)・デビリサン(出べ

そのこと)

右のように分類できたが、その中の、「おきなことば」「なぞらえことば」「重ねことば」は、幼児だけが使っているというのではない。このことばは、おとなが、子どもに話しかける時に、わざと使っている傾向がある。つまり、おとなは、子どもが言えることばでも、このように変えて、教えている。

しかし、「さかさことば」「省きことば」「替えことば」「縮めことば」「縮めことば」は、主として、子どもだけにみられるものである。これは、子どもの発音器官の未熟さと関係があるようである。

そこで、発音の面を、もう少し詳しくみてみることにする。つまり、幼児音について、調べていくことにする。

## 2 幼児音について

幼児は、発音器官の発達が、不十分である。そのため、正しく発音することができず、自分で作り出したり、自分の覚えている音韻を代用して、幼児音といわれるものを生み出している。分類したものを、次にあげてみる。

(A) 母音が変わったことば

①  $\wedge$ Ca  $\downarrow$ Co  $\vee$  注・上の  $\wedge$  は a が o に変わったことを表わす。以下同じ

(例) ハヤク  $\downarrow$  ハヨク

②  $\wedge$ Co  $\downarrow$ Ca  $\vee$

(例) ホラホラ(感動詞)  $\downarrow$  ハラハラ

③  $\wedge$ Cu  $\downarrow$  Ci  $\vee$

④ (例) ヤツツケロ ↓ ヤツチケロ

④ Ce ↓ Ci ↓ V

(例) ダレ ↓ ダリ (誰) ↓ ダリ

⑤ Ce ↓ Co ↓ V

(例) エプロン ↓ オプロン

(B) 子音が変わったことは

① r ↓ V ↓ d ↓ V

(例) レンシユウ ↓ デンシユウ

(例) キイロ ↓ キイド

(例) ラクダ ↓ ラクラ

(例) ↓ デ ↓ (格助詞) ↓ ↓ レ ↓

(例) ジド ↓ シャ ↓ ジロ ↓ シャ

② b ↓ V ↓ m ↓ V

(例) アブナイ ↓ アムナイ

(例) タクマバル (地名) ↓ タクババル

③ s ↓ V ↓ h ↓ V

(例) オイシカッタ ↓ オイヒカッタ

(例) アヒル ↓ アシル

(例) ヘビ ↓ セビ

(例) ソンナラ (それなら) ↓ ホンナラ

④ t ↓ V ↓ cj ↓ V

(例) キツチャッタ (切っちゃった) ↓ キツチャツ

チャ

(例) タベチャッタ ↓ タベタツタ

⑤ z ↓ V ↓ zj ↓ V

(例) オミズ ↓ オミジユ

(例) ゴーリ ↓ ジョーリ

(例) オマンジュウ ↓ オマンズ

⑥ s ↓ V ↓ sj ↓ V

(例) ハサミ ↓ ハシヤミ

(例) バス ↓ バシユ

(例) フウセン ↓ フウシエン

(例) アソコ ↓ アシヨコ

⑦ s ↓ V ↓ cj ↓ V

(例) オサケ ↓ オチャケ

(例) スベツタ ↓ チュベツタ

(例) センセイ ↓ チェンチェイ

⑧ s ↓ j ↓ V

(例) キシャ ↓ キチャ

(例) モシモシカメヨ ↓ モチモチカメヨ

。 sjo ↓ tjo (例) オシ・ヨ・ユ ↓ オチ・ヨ・ユ

⑨ KV ↓ cjV (例) キタナイ ↓ チタナイ

。 Ki ↓ cji (例) キタナイ ↓ チタナイ

。 Ke ↓ cje (例) オン・ド・ケイ ↓ オン・ド・チ・エイ

⑩ SV ↓ tV ↓

。 Se ↓ te (例) イケマセン ↓ イケマテン

。 So ↓ to (例) ソラ ↓ トラ

⑪ gV ↓ Vz ↓

。 gi ↓ zi (例) ツギ (次) ↓ ツジ

⑫ ^ cV ↓ cjV ↓

。 tsw ↓ cjw (例) アツイ ↓ アチュイ

(C) 子音がおちたことば  
(例) オリロ ↓ オイロ

(D) その他

(例) ノム (飲む) ↓ モム

このように分類できた。「子音が変わったことば」の中で示したように、子どもは、「レ」と「デ」の音を、それぞれ入れかえて、発音している傾向がある。これは、子どもが、ことばというものを、耳で聞いてから、その後話せるようになるということを考えてみると、「レ」の音と「デ」の音が、同じ音にきこえやすいからだといいうことができよう。他にも、「ロとド」「ダとラ」「プとム」「マ

とバ」「シとヒ」「へとせ」などを、あげることができる。

さて、子どもは、「キ」の音のかわりに、「チ」の音を使っている。こういう子どもは、「ギ」の音を「ジ」の音に、置きかえる傾向があるようである。例えば、K児(男・5)は、

○サツ・チネ ジャクハンタイダツタヨ。

前のは逆反対だったんだよ。

というおしゃべりをしている。

また、子どもは、「サ行音」を、うまく発音することができず、他の音に置きかえているのがめだっている。そして、子どもは、「チャ」「チュ」「チヨ」の音を、多く使っている傾向がある。

### 第二章 幼児語の発達過程

子どもは、ことばを、おとなから教えてもらい、それを真似することによって、次第に覚えていく。はじめ、無意味なことばであったのも、年令が進むにつれ、意味を持ったことばとなり、おとなとの会話も、自由になっていく。

この章では、年令別に、幼児の言語生活の特徴をみていくことにする。

#### (1) 2才児のことば

この時期は、会話らしい会話が、なされていないようである。ことばはあっても、相手との交流が少ないのである。そのため、言語生活は、ひとりごとが多くなっている。このような時期であるから、文の構造も単純であり、ことばも、簡単な単語を使用している。そのため、名詞や擬声語、擬態語が多いのが特徴といえるようである。

ここで、名詞について考えてみたい。2才児のことばの多くは名詞である。その中でも、食べ物に関するものがめだっている。例えば、

○オマンズ。(女・2) おまんじゅう。注・上の( )内は、性、年令を示す、以下同じ。

○ニューニュー。(男・2) 牛乳。

などである。右の例のように、子どもは、食べものに関する一語だけ、使っている。しかし、この年令において、この単語は、食べ物という事物そのものを、意味しているのではない。つまり、子どもが、「オマンズ」と言った場合は、「これは、おまんじゅうです。」ということ、意味しているのではなく、「わたしは、おまんじゅうが食べたい。だから、ちょうだい。」ということ、意味しているのである。短かい単語は、依頼の意味を持たせて、使用しているのである。

このように、2才児の、飲食物に関係したことは、子どもの欲求、願望というものを含んでいる傾向がある。

さて、動物に関する名詞も、この時期では、頻繁に、使用されている。

○ワンワン。(女・2) 犬。

○ブンブン。(男・2) 虫。

これは、前章の、「幼児独得のことば」で述べた、「なぞらえことば」に属するものである。2才児は、動物の鳴き声や、動く様子からとった、つまり、擬声語、擬態語で言っている。「なぞらえことば」は、動物類に関したものが多いが、この年令では、頻繁に使用されている。

さて、自分の身体に関することはであるが、これも、多く習得されている。例えば

○オメメ。(女・2) 目。

○オミツミー。(男・2) 耳。

などが、そうである。このように、自分の身体に関する単語は、2才児に、多く使われているようである。

さて、擬声語、擬態語については、前に少し述べたが、ここで、もう一度考えてみたい。

このころの子どもは、ひとり遊びをしても、黙っているということはないようである。ほとんど、動作にことばが、伴っている。そこで、自然、擬声語、擬態語も、多くなるのであろう。例えば、

○トトトン コチョコチョコ……(男・2)

これは、柱をたたいて、ひとり遊びをしていた時のことばである。

○ゴシゴシ……。(女・2)

これは、折り紙の時間に、糊を紙につけながら、発したものである。

右の例のように、子どもは、ある行動をする時、必ずといっていくらい、ことばを、伴っている。擬声的表現、擬態的表現が、ほとんどである。これは、2才児の特徴の一つとして、いいのではなからうか。

さて、今、述べたように、この時期では、文の構造が、簡単である。そのため、名詞一語だけの短かいことばが、盛んに使われているのであるが、動詞を使用する時も、一語だけの場合が、多いようである。

○ノンジャッタ。(女・2) 飲んでしまった。

これは、「ミルクオ」ということばが、省かれている。

○シメタ。(男・2) 閉めた。

これは、「マドオ」ということばが、省かれている。

このように、一語で、表現されている。

以上、名詞、あるいは動詞を、一語だけ使った例文をあげてみた。が、この簡単な構造から、もう少し詳しい表現になり、二語、三語使用した場合は、どうなるであろうか。

○オンナジ ナイ モン。(男・2) 同じではないもの。

これは、「オンナジ」の下の、「デワ」あるいは「ジャ」が、省略されている。つまり、断定の助詞と、係助詞の省略である。次にあげる例文にも、助詞、助動詞の省略がみられる。

○ココ ダメ モン。(男・2) ここは、だめなもの。

つまり、係助詞の「ワ」と、断定の助動詞の「ダ」が、省略されている。

このように、2才児では、助詞、助動詞の使い方が難しいようである。省略してしまうか、または、簡単な文にしてしまう傾向がある。

さて、この時期は、文法的にも、誤用がめだつようである。次にあげる例文は、Y児(女)にみられたものである。

○オモチオ ヤケテ。 おもちを、焼いてちょうだい。

○イ オ アイテ。 イを、開けてちょうだい。

と、これは、「イしてほしい。」という、依頼の気持を持って、言ったことばである。「ヤイテ」「アケテ」となるべきところが、右のように、自動詞にかわっているのである。これは、2才児が、自分

本位の生活であるため、それが、言語生活にも現われて、他動詞となるべきところが、自動詞になったのであろう。

また、この時期は、ことばの覚えはじめの時期でもある。そのため、ことばと、その意味を、確かに結びつけておらず、次のような例を、あげることができる。

○シメショ。(女・2) 閉めましょう。

これは、J児のことばである。このJ児は、開ける時も、閉める時も、区別せずに、「シメル」という一語だけを、使っている。また

○サムイ。(男・2) 寒い。

これは、八月の大変暑い日に、上着を脱ぎながら、言っていたことばである。「アツイ」と言うべきところを、反対に「サムイ」ということばで、表現しているのである。

このように、この年令では、自分の覚えている単語を、置きかえて表現し、まだ、適確な使用が、難しいようである。

(2) 3才児のことば

この時期は、2才児に比べて、動作は大きくなり、動く範囲も広がってきている。

2才児に多くみられた、擬声語、擬態語は、3才児においては、どうであろうか。

○バッキューン。(男・3)

○ギャオーツ。(女・3)

これらは、ピストルごっこや、怪獣ごっこをして遊んでいた時のことばである。

このように、2才児と比較した場合、減少しているとは、いえないようである。

さて、この時期になると、社会との結びつきが、2才児に比べて、強くなっている。そのため、テレビの影響が、ことばにも、あらわれてくる。

○アカカゲガ キェルト バイ。(男・3)

赤影が消えるんだよ。

○ケ・ロー・ヨン。(女・3)

というような例を、あげることができる。

テレビ、ラジオというものは、一般に、流行語というものを、作り出す。子どもは、この流行語を、直接、あるいは間接に、敏感にとらえている。

○オレワ シンジマツタダー。(男・女・3)

○ワラッテヤツテクラサイ。(男・3)

などは、流行語となっているものである。子どもは、流行語の持っている意味が、場面場面に合わなくても、自由に使い、喜んでいく。

さて、「なぞらえことば」であるが、これは、このころから、次第に、減少している。

○イヌカラ カミツカレタ。(女・3) 犬にかまれた。

○ミエコチャントコノイヌ。(女・3) みえ子ちゃんの家の子犬というように、2才時の「ワンワン」が、「イヌ」ということばに、変わっている。

ここで、「なぞらえことば」について、考えてみたい。

2才児は、「チツチ(鳥)」「ブンブン(虫)」という「なぞらえことば」を、鳥類、虫類の全てに対し、使っているのである。つまり、すずめにも、ツバメにも「チツチ」と言い、とんぼにも、蜂

にも「ブンブン」と言っている。

ところが、3才児になると、

○アラ スズメダン。(男・3) あれはずずめだよ。

○トンボダン。(男・3) とんぼだよ。

というようになっていく。これは、子どもが、物に名前があることを知り、それを知ろうとする意欲が現われて、語彙が増加したからだということができる。

さて、文の構造であるが、3才児になると二語、三語による表現が多くなってくる。しかし、2才児にみられたような、助詞を省略した文が、まだ使われている。

○ナオチャン ホーガ ツヨイモン ネ。(女・3) なおちゃんの方が、強いもんね。

というように、格助詞「ノ」が、省かれて表現されている。

子どもには、助詞、助動詞の使い方が、難しいということができる。

さて、この時期になると、代名詞というものが出てくる。

○オレノ ツギダー。(男・3) 俺の次だよ。

○シランモーン ワタシワ。(女・3) 知らないもの、私は。自分のことを、「ワチャン」と呼んでいたのが、右の例のように、一人称代名詞に、変わっている。

次に、この時期の特徴として、ことばのくり返しが多いということ、あげることができる。

○ウマイ ウマーイ。(女・3) 上手だなあ。

○タベヨツ タベヨツ。(女・3) 食べよう。

というように、同じことばのくり返しが、多くみられる。もちろん

前に述べた、擬声語、擬態語も、くり返して使われている。しかし右にあげたものは、擬声語、擬態語とは、違ったり返してであるといつて、いいのではなからうか。なぜなら、この時期は、自己の主張というものが強くなっており、子どもは、相手に、より伝えたいために、くり返して表現しているからである。つまり、社会性というものができて、相手の存在を、意識するようになったということが出来る。このことは、ことばの中に、呼びかけ性というものが、含まれてきたと、いえるのではなからうか。

(3) 4、5、6才児のことば(調査した結果、4、5、6才児のことばの区別が、はっきり認められなかったため、ここでは、一段階としてまとめて、考えていく。)

この時期になると、一応、「なぞらえことば」「おきなことば」を、卒業するようである。

発音の面からいっても、「幼児音」というものは、減少してきている。

社会とのつながりも、一段と強くなり、おとなとの会話が、自由になってくるようである。このため、おとなの社会の影響を受けたと思われることばづかいが、頻繁になってくる。例えば、

○カーチャンノ タメナラ エーンヤコラ。(女・4)

○カクトコ ナイジャン。(男・5)

などは、おとなが、使用する場合には、ある種の解放感を含み、また、ふざげた意味を、持っているものである。

以上の例でもわかるように、この年令では、おとなの社会の、特定の場に生じたことばを面白がって使用するという傾向がある。

さて、この時期になると、

○ワルイコト シタケンネ スナカケタ。(男・4) 悪いことをしたから、砂をかけた。

○トドイター コレデ シタケン。(男・5) 届いたよ。これでしたから。(棒を使ったから。)

のように、理由・原因をあらわす、接続助詞「ケン」(共通語の「カラ」)が、使われている。そのため、表現が、説明的になっている。「ケン」の他、「ト」という接続助詞の使用もみられ、この時期になると、接続助詞の使い方が、めだってくるようである。また、可能・不可能をあひわすことばづかいもみられる。

○カキランモン。(男・4) 書けないもの。

○コギャン シキル。(男・4) こんなに、できるよ。

などがそうである。

一般に、可能動詞の出現は、遅い傾向にあるといえるようである。

また、自分の年令云外の数詞の使い方が、自由にできるものも、このころからである。

○ウサギ ジュッコモ オル。(男・4) うさぎが、十羽もいるんだよ。

○イチ ニノ サンノ ポイン。(男・5) 一、二の三の、それだ。

などの例を、あげることができる。

そして、このころから、時間の認識が、できるようである。

○キノー ドコカ イッタ。(女・5) きのう、どこかへ、行ったよ。

○センセイ ボクノ オニトチャンワ アシタ オヤマエ イク

ンヨ。(男・4)

先生、僕のおにいちゃんは、あした、お山へ、行くんだよ。のように、時間的観念が、はっきりしてきていることがわかる。

さて、おとなとの会話が、自由にでき、自主的になると、次のようなおしゃべりも、頻繁になってくる。

○ナメクジワネ ニンゲンノチバネー トッテ シヌヨー。(男・4) なめくじはね、人間の血をとって、死ぬんだよ。

これは、得意そうに、しかも、驚きの表情を持って、話してくれたものである。現にないことを、想像して、作り出したものである。この年令では、右の例のような、つくり話といったようなものが、多くみられる。

さて、生活する社会が、広くなってくると、一つのものから、他のものを思い起こすことが可能になり、「ミタイ」「ミタカ」「ゴタル」という語が、使われてくる。

○アー オネーチャンミタイ。(男・4) おねえちゃんのようにだ

○ワー チョーチョミタカ。(男・4) 蝶ちょうみたいた。

○カネブンノゴタル。(男・5) かなぶん(こん虫)のようだ。

などが、そうである。

次に、二人称代名詞について、考えてみたい。

女兒は、「トチャン」の呼び方であるが、男児の場合は、次の例をあげることができる。

○オマエガ バカタ。(男・4) おまえの方が、よほど、ばかだよ。

○オマエタチワ ドケー。(男・4) おまえたちは、そこを、ど

くんだよ。(命令)

このように、二人称代名詞の「オマエ」が、使用されているのである。

そして、男児は、このころから、次第に乱暴なことはづかいたとなり、男児、女児のことばづかいの違いが、めだってくる。

以上、幼児言語の発達過程をみてきた。その結果、次のような傾向が、認められるようである。

2才児の段階から、3才児の段階に移る時の発達が、著しいようである。

子どもは、社会の影響を受けやすく、ことばに対して、敏感である。

そのため、非社会的言語から、社会的言語への変化がみられる。

## 結 語

わたしたちは、ことばというものを持っている。そのことばで、自分の考え、行動しようとするのを、相手に伝える。

子どものことばの発達は、子どもの社会性の発達とつながっている。子どもは、一つの短かい、あるいは、時には誤ったことばの中に、自分の考え、そして行動を示そうとする。ことばが、如何に、

精神的、思想的なものを持っているかに驚かされた。そして、子どものことばには、おとなの言語社会が、映し出されている。ことばの重要性というものを、再認識した次第である。

もっと、幼児言語の傾向をとらえ、調査、研究していけば、成人社会における言語との関係が、はっきりしてくるのではなからうか。そこまで、できなかったことが残念である。(卒業論文「熊本

市域における幼児語の研究」より)